慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グリフィスにおける横井小楠像の形成過程
Sub Title	
Author	高木, 不二(Takagi, Fuji)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2004
Jtitle	近代日本研究 No.21 (2004.) ,p.143- 167
JaLC DOI	
Abstract	グリフィス(William Elliot Griffis) は明治の初めに日本に来たお雇い外国人の草分け的存在である。オランダ改革派教会に後押しされながらアメリカから来日し、一八七一年に福井に赴き、藩校明新館で理化学を教え、翌年には東京にでて開成学校の化学教授として化学局の創設にかかわるなど教育に貢献し、一八七五年に帰国している。帰国後はThe Mikado's Empire皇国を出版し、牧師あるいは著述家として、終生精力的に日本の紹介に勤めた人物であることはすでに知られているとおりである。またグリフィスは明六社の通信員になっており、福沢諭吉をはじめとする明六社員との交流も確認できる。そのグリフィスがなぜか会ったことのない幕末の思想家横井小楠について強い関心をもち、彼の著作や論説のなかでしばしば言及しているということが、かねてからわたしの興味を引いていた。その点に関して山下英一氏は次のような指摘をしている。小楠についてグリフィスは「横井小楠は王陽明の哲学の熱心な信者で、心はキリスト教信者であった。一八六九(明治二)年キリスト教信仰の自由を主張し、差別されていた人々をも公民にまで引き上げようと計ったため暗殺された。」(日本のラトガース卒業生一八八五)と述べ、「その精神において、これはリンカーンの偉業にも比すべき仕事である。そしてリンカーンのごとく、彼の労苦は暗殺をもってむくいられたのだ。」(ミカド・日本の内なる力一九一五)と小楠の不慮の死を悼んでいる。グリフィスは小楠の「学政一致」などにみられる思想の根本は中江藤樹によって理解された中国明代の学者王陽明の哲学であると考えた。藤樹の陽明学のなかの知行合一論は「学問は天下国家をおさむる政なり。本来一にして二、二にして一なるものと心得べし」と説く。「為すべしと判断したことは必ず実行せよ」との実際主義が江戸幕府の官学であった朱子学に対抗する思想になった。まさにグリフィスの国アメリカのフロンティア精神と近代科学の普及を標榜するプラグマチズムに通じる考えであった。また小楠をキリスト教信者であったとグリフィスが考えた。小楠は西洋近代文明の背

	景、経世済民の働きにキリスト教があるとしてその肯定・受容の態度をとった。それがグリフィスに小楠をクリスチャンと思わせたのだろう。ここにグリフィスの小楠像に関する問題点は、ほぼ集約されていると言ってよい。このなかで山下氏は小楠像の形成過程をグリフィスの側から内在的にとらえようとしているのであるが、それでも差別されていた人々グリフィスにおける横井小楠像の形成過程をも公民にまで引き上げようと図ったという理解はどこから来るのだろうかという疑問は残る。いずれにせよ、横井小楠を① 被差別民の解放者、② キリスト教信者、③ 陽明学者とみる視点は、現在の横井小楠研究者の視点と大きな隔たりがある。グリフィスのそうした横井小楠像の形成過程を具体的につきとめるのが本稿の課題である。なお本稿でしばしばふれるグリフィス・コレクションとは、アメリカニュージャージー州ラトガース大学のアレクサンダー図書館スペシャルコレクションズに収められているもので、グリフィスみずからが保存した日記・書簡・草稿をはじめとして、かれが日本で集めた地図や民俗資料などを含む一連の資料群のことである。また本文中の引用史料に被差別民に関して差別的な用語や表現を用いている箇所があるが、それはあくまで歴史研究・歴史分析の必要上引用するものであって、差別意識を助長することを意図するものではない。史料を差別意識助長のために利用することは許されるべきことではないと考える。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20040000-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十一巻（二〇〇四年）

グリフィスにおける横井小楠像の形成過程

高木不二

はじめに

グリフィス（William Elliot Griffis）は明治の初めに日本に来たお雇い外国人の草分け的存在である。オランダ改革派教会に後押しされながらアメリカから来日し、一八七一年に福井に赴き、藩校明新館で理化学を教え、翌年には東京にでて開成学校の化学教授として化学局の創設にかかわるなど教育に貢献し、一八七五年に帰国している。帰国後は *The Mikado's Empire* 皇国 を出版し、牧師あるいは著述家として、終生精力的に日本の紹介に勤めた人物であることはすでに知られているとおりである。[1] またグリフィスは明六社の通信員になっており、福沢諭吉をはじめとする明六社員との交流も確認できる。

そのグリフィスがなぜか会ったことのない幕末の思想家横井小楠について強い関心をもち、彼の著作や論説

のなかでしばしば言及しているということが、かねてからわたしの興味を引いていた。[2]

その点に関して山下英一氏は次のような指摘をしている。

小楠についてグリフィスは「横井小楠は王陽明の哲学の熱心な信者で、心はキリスト教信者であった。一八六九（明治二）年キリスト教信仰の自由を主張し、差別されていた人々をも公民にまで引き上げようと計ったため暗殺された。」（日本のラトガース卒業生一八八五）と述べ、「その精神において、これはリンカーンの偉業にも比すべき仕事である。そしてリンカーンのごとく、彼の労苦は暗殺をもってむくいられたのだ。」（ミカド・日本の内なる力　一九一五）と小楠の不慮の死を悼んでいる。グリフィスは小楠の「学政一致」などにみられる思想の根本は中江藤樹によって理解された中国明代の学者王陽明の哲学であると考えた。藤樹の陽明学のなかの知行合一論は「学問は天下国家をおさむる政なり。本来一にして二、二にして一なるものと心得べし」と説く。「為すべしと判断したことは必ず実行せよ」との実際主義が江戸幕府の官学であった朱子学に対抗する思想になった。まさにグリフィスの国アメリカのフロンティア精神と近代科学の普及を標榜するプラグマチズムに通じる考えであった。また小楠をキリスト教信者であったとグリフィスが考えた。小楠は西洋近代文明の背景、経世済民の働きにキリスト教があるとしてその肯定・受容の態度をとった。それがグリフィスに小楠をクリスチャンと思わせたのだろう。[3]

ここにグリフィスの小楠像に関する問題点は、ほぼ集約されていると言ってよい。このなかで山下氏は小楠像の形成過程をグリフィスの側から内在的にとらえようとしているのであるが、それでも差別されていた人々

をも公民にまで引き上げようと図ったという理解はどこから来るのだろうかという疑問は残る。

いずれにせよ、横井小楠を①被差別民の解放者、②キリスト教信者、③陽明学者とみる視点は、現在の横井小楠研究者の視点と大きな隔たりがある。グリフィスのそうした横井小楠像の形成過程を具体的につきとめるのが本稿の課題である。

なお本稿でしばしばふれるグリフィス・コレクションとは、アメリカニュージャージー州ラトガース大学のアレクサンダー図書館スペシャルコレクションズに収められているもので、グリフィスみずからが保存した日記・書簡・草稿をはじめとして、かれが日本で集めた地図や民俗資料などを含む一連の資料群のことである。

また本文中の引用史料に被差別民に関して差別的な用語や表現を用いている箇所があるが、それはあくまで歴史研究・歴史分析の必要上引用するものであって、差別意識を助長することを意図するものではない。史料を差別意識助長のために利用することは許されるべきことではないと考える。

一　グリフィスと横井小楠の出会い

グリフィスが日本に入った一八七〇年の前年には横井小楠はすでに暗殺されてこの世にいなかった。したがって何らかのかたちで、彼に小楠について興味を抱かせるきっかけなり状況があったことを想定しないわけにはいかない。

可能性としては、次のようなことが考えられる。

I　グリフィスが学んだラトガースカレッジにおける、横井小楠の甥にあたる横井左平太・大平との出会い。

Ⅱ　福井において、横井小楠の影響を受けた人物との接触、交流。
Ⅲ　帰国後における日本人との接触。

Ⅰの可能性が一番考えやすいところである。実際横井左平太・大平は一八六六年四月に長崎をたち、同年の一〇月か一一月にはニューヨークを経て、ラトガースカレッジのあるニューブランズウィックに入っていた。彼らは叔父であり養父でもある横井小楠の意向をうけて、「西洋器械の術」ことに海軍の強化に役立つ知識を身につけるためにアメリカにやってきたのだが、ニューヨークのオランダ改革派教会の事務所において、まずは語学をはじめとする基礎学問を学ぶ必要性を伝道局主事であったフェリスに説得され、ラトガースカレッジの付属予備校ともいうべきラトガースカレッジ・グラマースクールで学ぶことになったのである。ラトガースカレッジはオランダ改革派教会系のニューブランズウィック神学校と不可分の関係にあるカレッジで、当時ようやく南北戦争後の社会変革のなかで宗教色をうすめ、拡大路線をとりはじめていたところであった。グラマースクールもこれと歩調をあわせていた。彼らを受け入れる基盤があったのである。やがて弟の大平は肺を病んで一八六九年七月帰国し、兄は同年一二月アナポリスの海軍兵学校（U. S. Naval Academy）に入学するが、それまでのあいだ彼らはこのラトガースカレッジ・グラマースクールで学ぶのである。このときグリフィスはカレッジ在校生として彼らに英語を教える機会をもったという。彼らの行動には当然のことながら養父小楠の意向が強く反映されていたことを後年のグリフィスが語っているが、彼らとの接触のなかでグリフィスが横井小楠について知るところがあったとしても不思議ではない[4]。

Ⅱについては、かつて福井に賓師として招かれた小楠の影響をうけて、福井藩内の改革や幕政改革に力を尽くしたメンバーが現役で内外で活躍しており、彼らからグリフィスが小楠情報を得ることは可能であった。小

楠を暗殺した犯人グループが処罰されたのはグリフィスが来日する直前の一八七〇年一〇月の事でもあり、まだキリスト教を擁護したとして殺された小楠についての話題が人々の口の端にのぼることは珍しくなかったであろう。こうしたなかで小楠の影響が顕著で、しかもグリフィスと会ったことが確認できる福井人としては、由利公正・村田氏寿・下山尚などがあげられる。しかしこのほかにも、前福井藩主松平春嶽や彼の学生から小楠に関する情報を得る機会も少なくなかったであろう。

Ⅲについては、帰国後グリフィスはアメリカにやってくる多くの日本人とつとめて接触を持っている。そのなかから小楠情報を得た人物を特定するのは困難であるが、しいて可能性の高い人物をあげれば小楠の実子で熊本洋学校に学び、熊本バンドの中核となる横井時雄と、同じく熊本出身でグリフィスと個人的に親しく、横井時雄の後輩で親友でもある原田助が挙げられよう。彼らはともに後年同志社社長になっている。

以上をふまえた上で、グリフィスがいつから横井小楠に具体的に言及しはじめるかということが問題解決につながる重要なヒントになる。そこで彼の著述活動を追っていくと、彼が横井小楠について著作や論説においてふれはじめる時期は意外に遅いことに気づく。

管見のかぎり、最初にグリフィスが小楠についてふれているのは、一八九〇年の『皇国』の改訂版の追補においてである。そこでは明治維新をおこした先見の明ある愛国者として、高野長英・渡辺崋山・橋本左内・藤田誠之進（東湖）・佐久間修理（象山）・吉田寅次郎（松陰）・横井平四郎（小楠）・松平慶永（春嶽）の名があげられ、とりわけ横井小楠の弟子として松平春嶽が「公議論」を唱え、明治議会制の創設に先駆的役割を果たしたとして、その功績を賞賛している。(5)

なお山下氏が示した、先に紹介した「日本のラトガース卒業生　一八八五」の史料は、実は一九一六年の第

二版のものであって、初版のものについては横井小楠についての記述はない。念のため、その部分について原文で引用しておく[6]。ちなみに文中の伊勢佐太郎（Sataro Ise）は横井左平太、沼川三郎（Numagawa）は横井大平の渡米時の変名である。

Sataro Ise, born in Kumamoto, Higo, was the first Japanese student in New Brunswick. He studied at the grammar school during a few month, and then entered the Naval Academy at Annapolis, but failed to pass the examinations. "He went home deeply chagrined and died soon after."

Numagawa of Kumamoto, Higo, was for a short time in New Brunswick in 1870, but was obliged to return home on account of ill health. From Kumamoto he sent several students to study Fukui. He was a noble specimen of a Japanese samurai, and on his return was influential in founding a school in his native city before he died. This school was for several years in charge of Captain Janes and become noted for its excellence. Many of its graduates taking their theological course in Kioto became Christian ministers and missionaries.

そして山下氏が引用した横井小楠の記事は一九一六年の第二版において、つぎのようなかたちで挿入される。

"Sataro Ise", born in Kumamoto, Higo, was the first Japanese student in New Brunswick (See Dr. Ferris' letter). He studied at the grammar school during a few month, and then entered the Naval Academy at Annapolis, but failed to pass the examinations. "He went home deeply chagrined and died soon after." He and "Numagawa"

were both nephews of Heishiro Yokoi (Yokoi Shonan), an ardent disciple of the Oyomei philosophy, lecturer at Fukui, and at heart a Christian. He was assassinated in Kioto, in 1869, for proposing the toleration of Christianity and the elevation to citizenship of the Eta or social outcasts.

そしてグリフィスの書いたもののなかで、横井小楠に関するもっとも詳細なものと思われるのは一九一五年に書かれた『ミカド　日本の内なる力』にある一文であろう。[7] とすると、グリフィスは一八八五年（『日本のラトガース卒業生　初版』）から一八九〇年（『皇国　改訂版』）、あるいは一九一五年（『ミカド　日本の内なる力』）のあいだに、何らかのかたちで横井小楠にたいする関心をたかめ、認識を深めるきっかけをもったことになる。

二　横井時雄との出会い

そして調べていくと、グリフィスは一八八九年に横井小楠の実子である横井時雄（伊勢時雄）にボストンで会っていることが確認できるのである。

時雄が渡米した経緯については、グリフィス・コレクションに収められている『本郷基督教会堂』という日本語のパンフレットに次のように記されている。

明治十九年の秋の頃なりき、組合教会牧師海老名弾正氏本郷湯島に「アバラ」家を借受け、博愛館と称し

て茲に基督の福音を宣べ伝へたり、是れ実に本会が其萌芽を発したるのときなり。……明治二十年の夏海老名氏熊本に転じ、後事を横井時雄に託す。……牧師横井時雄氏は教会堂建築の議を起し、是を会員に謀る、……然ども……会員寄付の金額は合して数百円にすぎず、……此に於て乎横井氏は遠く米国の教友に謀りて金一万ドルを募集するの企を起し……単身漂然米国に向ひて出発す、時に明治二十二年三月二日なり。氏の米国に在るや……ボストン府に於ては、メリマン及グリフィス……の諸氏各起て横井の企を賛し、之が為に斡旋尽力して終に金貨一万弗の寄付をなすに至れり……茲に於て横井氏十月十八日ニューヨークを発し、……我国に帰る。

すなわち、当時海老名弾正のあとをうけて本郷教会の牧師であった時雄が一八八九年に本郷教会堂の建設資金調達のため渡米し、グリフィスと会ったというのである。念のためグリフィスの日記にあたってみたところ、次のような記事を見出すことができた。(8)

伊勢氏（I. T. Ise）と日本の本、とくにバジルホール＝チェンバレン教授と末松謙澄氏（K. Suyematsu）の手で日本から最近送られてきた本を読むために、四階を一週間ほど確保した。（1889, 9/10）

伊勢はわたしのために『高野長英伝』（*Life of Takano Choye*）を読んでくれた。（1889, 9/19）

伊勢は言うまでもなく横井（伊勢）時雄のことである。このときの経験が翌年の一八九〇年版の皇国の追補

に反映していることは、そのなかに高野長英の名前がでていることによって確認できるだろう。

だがこれだけでは横井時雄がグリフィスの小楠像形成にどれだけ影響を及ぼしたのかはわからない。ところがグリフィス・コレクションのなかに、横井時雄の直筆による次のような走り書きのメモが見出せるのである。英文の殴り書きともいえるものであるが、以下Aとして訳をかかげる。これと、グリフィスの書いた『ミカド　日本の内なる力』の一文Bとを読み比べて欲しい。[9]

A　王政復古ののち父は召されてミカド政府の一員となりました。そのなかでは最年長で六一歳でした。父の役割は、フランクリンがその同僚のあいだで果たした役割に近いものと思われます。彼は最初に人間以下とみなされていたえた身分の差別を廃止するために働いたのです。……キリスト教信仰について言えば、父は中国語訳で聖書を読みました。……父は著作のなかでさりげなくキリスト教信仰がもたらす良い結果について語り、日本の劣悪な宗教的環境を嘆いています。父はかつて友人への手紙のなかでわかりやすい言葉で、キリスト教は数年のうちに優れた若者たちの心に近づき、その心をとらえるであろうと、語ったことがあります。しかし父はついにキリスト教徒にはなりませんでした。

B　儒教の倫理と哲学を講じ、越前の精神的指導者であった横井小楠については、その主君に及ぼした影響力において、ちょうどジョージ・ワシントンの下にいたアレグザンダー・ハミルトンに匹敵するといえば十分であろう。一八六九年、京都で暗殺者の凶刃に倒れる前、彼はシナ語訳の福音書によって「永遠のサムライ」を発見していた。歴史上のイエスがそれである。しかも幸いなことに、彼は教会の教義や伝統

にとらわれないでイエスを見ることができた。彼はすぐに心をきめ、その場でイエスのひそかな恐れを知らぬ弟子となった。そして彼は、日本の聡明な知識人たちも、イエスを正しく知るようになった時、この救世主を受け入れるだろうと予言した。彼は二人の甥（横井太平と佐平）をアメリカに留学させ、後に続く多くの先導者とした。一八六六年、私はこの若い二人をニュージャージー州のニュー・ブランズウィック（ラトガース大学）で教えるという光栄を得た。

一八六九年、京都新政府の会議において、横井は信教の自由だけでなく、エタつまり社会的賤民の地位を公民にまで引き上げることを主張し、実現を確実にした。その精神においてこれはリンカーンの偉業にも比すべき仕事である。そしてリンカーンのごとく、彼の労苦は暗殺をもって報われたのだ。何という気高い生涯であろうか。（亀井俊介訳、岩波文庫）

Bの文章における、被差別民の解放を進め、内心キリスト教を信奉していたとする横井小楠像が、Aの横井時雄のメモに依拠して書かれていることは明らかであろう。

なお横井時雄は小楠四九歳のときの子であり、小楠が不慮の死を遂げたときにはまだ一三歳であったことは予備知識として持っておく必要がある。

問題はAのメモが書かれた年月日が記されていないということである。このメモの体裁を述べておけば、便箋様の紙にI横井時雄について五枚、II父横井平四郎について六枚、計一一枚書かれている。おそらくグリフィスの求めに応じて、親子の履歴を書いて渡したものであろう。しかし幸いなことに末尾に、次のような一文が見出せる。

わたしの教会はこのところ混みあって、大きな建物が必要なことは明らかです。わたしは日本で募金活動をしましたが。八〇〇ドルしか集まりませんでした。そこで援助の寄付を仰げないかとこの国（アメリカ―高木）にやってまいったのです。

これからAのメモ書きは一八八九年時雄の渡米時のものであることが特定できる。日本語が十分に読めないグリフィスの横井小楠像の形成に大きく寄与したのは、英語に堪能で、しかも父の記憶がしっかりしておらず、クリスチャンであった息子横井時雄だったことになる。[10]

なおグリフィスと横井時雄のキリスト教会内における教派については、オランダ改革派教会（現在の第二改革派教会）という共通の根を持っていたことも確認しておきたい。時雄の宗教上の師にあたるジェーンズは、横井大平の要請をうけたフルベッキがニューヨークのフェリスに依頼して、熊本洋学校設立のために送り込んだ、米国陸軍の退役士官であったのである。[11]

三　原田助との出会い

もう一人グリフィスの小楠理解に寄与した人物がいる。先に指摘した原田助である。彼は熊本洋学校と同志社に学んだ牧師で、横井時雄の後輩にあたり、また親交もあった人物であるが、一八九〇年五月、ボストンでグリフィスに会っている。グリフィスはそのときの原田の印象を「知り合ってすぐ、わたしは彼の高いキリス

ト教的理想、親切な心根、強い個性、そして際立った学問的才能に感心した。」と記している。[12]

原田はニューヘブンのイェール大学に留学中で、その後も二人の交流は続いたが、一八九〇年八月六日ボストンのグリフィスの家に泊まったとき、原田は『小楠遺稿』（一八八九年刊）をグリフィスのために読んでいる。当日の彼の日記にはこう書かれている。[13]

午後九時ノ汽車ニテボストンニ来ル、例ニ依リグリフィス博士宅ニ泊ス、午後ヨリグ氏ノ為ニ横井小楠遺稿、日本新聞（議院選挙等）等ヲ読ム

ちなみに、原田は同郷の先達である横井小楠を尊敬していた。一八九七年の一二月のことであるが、横井時雄とともに南禅寺の小楠の墓に詣でたときの印象をこう述べている。[14]

横井（時雄）と共に南禅寺に散歩し、天授庵にある小楠先生の墓に詣づ。「沼山横井先生」の外に細川幽斎等の肥後人の墓少なからず。感慨無量。

原田がグリフィスに対していかなる小楠情報を付加したのかを知ることはできないが、彼が横井時雄とは同郷の同窓生でその父である小楠を敬慕し、同じ組合教会の牧師としても親交があった人物であることを考えれば、横井時雄がグリフィスに与えた小楠像が、原田によってそのまま定着させられていったことは想像に難くない。横井時雄と会った一八八九年と、原田助と会った一八九〇年、これがグリフィスの小楠像形成のうえで

大きな画期であったのである。

すでに述べたように、このあとグリフィスは一九一五年『ミカド　日本の内なる力』あるいは一九一六年『日本のラトガース卒業生　第二版』を相次いで刊行するのである。

四　被差別民の解放者小楠について

グリフィスが来日当初から日本の被差別民に関心をもったことは、『皇国』の記述からも明らかである。[15]

> 年老いた乞食が道路わきの藁の掘立て小屋に住んでいる。よごれた蓙に身をくるむ以外は裸である。日本の法律は乞食を人間と認めていない。乞食は畜生である。乞食を殺しても訴えられも罰せられもしない。道路に死んで乞食が横たわっている。いやそんなことがあろうかと思うだろうが、事実そうなのである。

これは来日直後の横浜での体験をもとに書かれた一文である。こうした封建的身分制度にたいする彼の厳しい目は、いろいろな体験を経る中で一層強まっていったものと思われる。一八七一年夏グリフィスは福井から泊りがけの旅行に出かけた。そのとき次のような事件に出会ったことを、彼は後年"The Abolition of Eta and Social Difference"という論説に記している。[16]その大要は次のようなものである。

> われわれ一行は川の渡し場にさしかかった。川は折からの大雨で増水していた。一人の乞食がわれわれの

後について、船に乗り込もうとした。かれは船賃を持っていなかったのである。ところが体が弱っていて、彼は足を滑らせ、川に落ちた。たちまち彼は奔流にのみこまれ、流されていった。しかし船頭もわたしに同行した武士たちも、だれも彼を助けようとはしなかった。わたしがどうして助けなかったのかと問うと、武士は「彼は乞食だし、体も弱っていたから」と平然とこたえて、また船中の眠りについた。

グリフィスはここにアメリカの奴隷制度と共通の問題を見出し、文明国の国民として、そしておそらくキリスト教的人道主義の立場からも、こうした封建的身分制の廃止におおきな関心をもった。そのなかで賤民解放令を発した明治天皇を高く評価するにいたるのである。[17]

睦仁は、リンカーンやニコラスのごとき偉大な解放者の系列に加えられる価値がある。なぜなら彼は、自分の人民でありながら別の種族あるいは「非人」として日本人から除け者にされていた二つの階級の地位を引き上げたのだから。

そしてこうした方向に政府を導いた理論的政治家として横井小楠を位置づけたのである。[18]

キリスト教徒横井平四郎（小楠）はたぶんこの国ではじめて、これらの人々の地位を引き上げ、市民権を認めるべきことを弁じた政治家であった。

封建的身分制を廃止する目を持った人物がキリスト教徒であって、はじめてグリフィスとしては納得がいったようにもうけとれる一文である。

しかし管見のかぎり、筆者は小楠が被差別民に関してなんらかの積極的な発言をしたという一次史料に接したことはない。グリフィスの被差別民の理論的解放者横井小楠という理解は、彼自身の問題関心のうえに、横井時雄の小楠像が移植されてはじめて生まれたものと考えられる。

五　キリスト教信者小楠について

当時国内に小楠がキリスト教徒、あるいはその好意的理解者であるという噂があったことは、かれが「天主教を海内に蔓延」させようとしているとして暗殺されたことからも明らかである[19]。

しかし横井小楠がキリスト教への一定の理解をしめしたことと、その日本への適用を是としていたこととは別の問題である。小楠がむしろ東洋道徳に至高の価値を見出していたことは、彼の甥たちがアメリカに旅立つときにおくった次の詩からも明らかである[20]。

堯舜孔子の道を明らかにし
西洋器械の術を尽くす
何ぞ富国に止まらん
何ぞ強兵に止まらん

大義を四海に布かんのみ
心に逆らうことあるも人をとがむるなかれ
人をとがむれば徳を損ず
為さんと欲するところあるも心を正とするなかれ
心を正とすれば事を破る
君子の道は身を修むるにあり

「堯舜孔子の道」すなわち聖人の道を理想とするのは、彼の学問の真髄である。そしてこの教えを守って左平太・大平の二人は渡米・帰国後もキリスト教に入信していなかった。それどころかクリスチャンとして有名な小崎弘道などは、帰国後の大平について、「彼は六年も（実際は三年）アメリカにいたにもかかわらず、キリスト教については無知であり、子供たちにキリスト教は無識者のための宗教であり、武士道に劣ると好んで語っていた」と述べている。[21]

また熊本洋学校のジェーンズの影響でキリスト教徒になることを決意した横井時雄に対して、小楠の弟子や親族がこぞって反対し棄教を求めたことは、徳富蘇峰による『蘇峰自伝』がつぶさに語るところである。[22]

実学連には耶蘇教といわれることは最も禁物であった。しかるに横井第二世といわれた時雄氏を始め、末輩の予（蘇峰）等に至るまで、耶蘇教を信じたといわれては、天下に対しても、家に対しても面目がないと言う事にて、ここにおいていわゆる迫害なるものが起こった。……後から最も熱心な信者となった竹崎

伯母、横井伯母及び吾母などの耶蘇教反対熱はすさまじきものであった。

言うまでもなく、蘇峰の父は小楠の高弟であり、母は小楠の後妻の姉にあたる。そしてこのとき時雄とともにキリストへの忠誠を誓ったメンバーのなかに蘇峰自身もいたことを考えれば、この記述は当時の横井家周辺の雰囲気をよく伝えているとみて間違いなかろう。実際時雄の自筆メモにも、「母はわたしが棄教しなければあなたと無理心中する」といって棄教をせまったと記している。このとき時雄は時間をかせぎながらまわりの反対熱がおさまるのを待ったが、その間三ヶ月の幽閉生活を余儀なくされたという。どこからみても、小楠とキリスト教との関係は、決して時雄が語るようなものでなかったことは明らかである。

しかし、こうした迫害に耐え、キリスト教徒としての時雄を支えたのが、彼なりの父親像・小楠像であったのだろう。そこには彼なりの亡き父親にたいする、強い思い入れが働いていたとみられる。グリフィスはこの小楠像を引き継いだのである。

六　陽明学者小楠について

これについて時雄はとくにメモのなかで語っていない。したがってこの小楠像は別の由来を持つと考えなければならない。山下氏が紹介した小楠を王陽明の学徒とする『日本のラトガース卒業生』にグリフィスが書いた一文が、一九一六年のものであることは、先に指摘したとおりである。そしてこれに先立つ一九一五年の『ミカド　日本の内なる力』には次のような記述がみられる。[23]

横井は王陽明の哲学（日本の「実際主義（プラグマティズム）」）を奉じ、近代日本の形成に大いに働いた予言者、そして業なかばにして倒れた殉教者の一人であった。

そして、管見のかぎり、横井小楠を王陽明の学徒と見る立場は、一九一〇年にグリフィスが *The North American Review* の編集者にあてた手紙にはじめて現れる。それは "The Oyomei Philosophy : or Japanese Pragmatism" というタイトルで論文を寄稿させてはもらえないかという依頼文において、その論文の要旨を述べたなかで登場する。[24]

> 陽明学は思想の新しい世界を生み出した。……それは反抗者・異端者そして近代精神の持ち主で、一八六八の革命の創造者であった英雄たちを作り出し、いまなお精神において日本の主流をしめている。……横井、彼は最初の日本人留学生を送り、良心の自由を助言し（そして勝ち取り）、見捨てられた人々を市民の地位にまで押し上げた人物であるが、その彼も王陽明の信奉者であった。

彼は伝統的儒教や新儒教（朱子学）とは異なる学問として陽明学に着目したのである。

グリフィスは『皇国』において明治維新を、封建制を廃し近代国家への道を切り開いた革命（Revolution）ととらえていた。それは廃藩置県という歴史的事件を福井において目の当たりにした、彼の原体験から導き出された理解でもあった。そしてその革命の主要な原因を、彼は外国からの圧力にではなく、それ以前の日本の

社会のなかに生まれ育った思想に求めようとした。そして水戸学と国学に注目したのである。これらの思想は、ともに天皇を将軍の上位に位置づけるなかで、天皇と将軍の二頭的政治体制（Duarchy）を克服する維新への道を開いたとして、その変革性に着目したのである。しかしこれらはあくまで復古（Restoration）思想である。彼としては、日本におけるキリスト教の受容の可能性をさぐるためにも、明治の「革命」を生み出した未来に向かう思想的な力を見極める必要があった。

そのとき横井時雄と出会い、彼の意識のなかで横井小楠の存在が大きくクローズアップされたのではないだろうか。小楠は封建制を批判する目をもち、キリスト教を理解する目を持っていた儒学者である。しかし伝統的儒教は保守的で、「進歩を歓迎する要素をまったく持たない」と彼は理解していた[25]。とすれば、それとは異なる儒教の流れはないのか。そのとき、彼は陽明学という存在に着目し、そこに日本の「進歩」の芽を見出したのである。

グリフィスは陽明学の特徴についてこう述べている。「陽明学はプラグマティズムに発展し、近代的進歩に敏感で、その機会に喜んで応じようとする世代を登場させることによって、フィルモア・ペリーやハリスを歓迎する道を準備した」[26]。そして小楠のみならず、橋本左内・松平春嶽・藤田東湖・吉田松陰・西郷隆盛・勝海舟・大久保利通・伊藤博文までもが陽明学の徒として挙げられている。『皇国』にみられた日本にたいする歴史認識が、ここにおいて乗り越えられ、『ミカド　日本の内なる力』へと向かう道が切り開かれたのである。

なお、グリフィス・コレクションには中江藤樹や太宰春台の著作をはじめ、『先哲叢談』[27]などの書物の英訳（部分訳をふくめて）が残されていることから、グリフィスがかなり江戸期の儒学について研究した跡をうかがいしることができる。

このときグリフィスに協力した日本人がいたことは確かであるが、その人物は特定できない。しかしその日本人を介して、彼が日本の儒学史研究の影響を受けていた可能性も否定できない。その意味で、杉井六郎の次のような指摘は参考になる。[28]

> 小楠を陽明学派に入れたのは井上哲次郎であり（『日本陽明学派之哲学』明治三三年、四篇三章横井小楠）、したがって熊本バンドの系譜は小楠のそれをひくと理解され、また内村鑑三もはやく陽明学を問題にして「保守的な朱子学とは異なって、陽明学は進歩的前望的（プロスペクティブ）にして希望に満てるものであった。それが基督教に似てゐることは従来一再ならず認められた所である。〔中略〕基督教に似た或るものが日本の再建に参加した一つの力であったといふことは、我が維新史における特異な一事実である」（『代表的日本人』所収「西郷隆盛」）という理解を示していた。

井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』が出版されたのが一九〇〇年、内村鑑三の『代表的日本人』の原著 *Representative men of Japan* が一九〇八年の刊行とすれば、直接間接こうした思想的影響がグリフィスによんだ可能性は十分に考えられる。[29]

陽明学者小楠という像は、グリフィスの日本の歴史を見る目と、当時の日本における儒学史理解が交差するところに形成されたと見るのが妥当かもしれない。

ちなみに小楠の学問系統については、「正学」すなわち朱子学を奉ずる儒学者として位置づけるのが今日の一般的な傾向である。[30] 筆者も、山崎学と水戸学をステップに朱子学を独自に展開した思想家として横井小楠を

とらえていることを付記しておく。[31]

おわりに

グリフィスが描いた横井小楠像のうち、被差別民の解放者、キリスト教徒としてのそれは、小楠の実子である横井時雄との出会いが決定的契機となって生み出されたものであることは間違いあるまい。しかしもうひとつの陽明学者小楠という像については決定的契機は見出せず、グリフィスの歴史の発展をその国の内発的契機から見ようとする歴史観と、かれに儒教理解に関する情報を提供した日本人などを介した当時の日本における儒学理解が交差するなかで生み出された可能性を示唆した。

いずれの場合も、グリフィスの日本における体験と、彼が身につけていたキリスト教という宗教的立場や、一般的な歴史に対する見方が基本にあり、そのうえで彼が直接的あるいは間接的に接した英語を操れる日本人からの情報が、大きな意味をもっていたことを指摘できるように思う。とくに一八九〇年以降のグリフィスについて考える場合には、原田助の存在にも留意すべきであることを指摘しておきたい。

注

（1）グリフィスに関する主な研究書、翻訳（解説を含む）は以下のとおりである。山下英一『グリフィスと福井』（福井県郷土史懇談会、一九七九）、同『グリフィスと日本』（近代文藝社、一九九五）、グリフィス著・山下英一訳『明治日本体験記』（平凡社、一九八四）、グリフィス著・亀井俊介訳『ミカド　日本の内なる力』（岩波文庫、一九九五）、

『ザ・ヤトイ　お雇い外国人の総合的研究』（思文閣出版、一九八七）、『近代化の推進者たち－留学生・お雇い外国人と明治－』（思文閣出版、一九九〇）

（2）グリフィス・コレクションには "A MONUMENT TO YOKOI SHONAN SENSEI" と題したファイルがあり、小楠が暗殺されたときの様子を宮川小源太が政府に報告した『太政官日誌』の記事が翻訳されており、グリフィスのこの事件に対する関心の高さがうかがえる。

（3）山下英一『グリフィスと福井』五七・五八頁

（4）杉井六郎「横井左平太と大平のアメリカ留学」（『明治期キリスト教の研究』、同朋社、一九八四）、西岡温「熊本における幕末・明治初期海外留学生」（『熊本英学史』本邦書籍、一九八五）、高木不二『横井小楠と松平春嶽』（吉川弘文館、二〇〇五）参照。

（5）W. E. Griffis, *The Mikado's Empire: A History of Japan* (New York, 2000), p.395

（6）W. E. Griffis, *The Rutgers Graduates in Japan* (Albany, 1885), *The Rutgers Graduates in Japan* (New Brunswick, 1916)

（7）グリフィス著・亀井俊介訳『ミカド　日本の内なる力』（岩波文庫、一九九五）、九二・九三頁。

（8）グリフィス日記（グリフィス・コレクション、GroupI Box4.3）

（9）ここで参考のため横井時雄の書いたメモの原文と、グリフィスが書いた著書の原文を掲げる。

A　When the Mikado was restored, my father was called to become a member of his cabinet. And he was the most aged member being at the time sixty one and his relation to theirs was I believe somewhat like that of Franklin to his colleagues. I think he first moved that the distinction of "Yeta", a class of people regarded to be below human beings, be abolished....In regard to xty he read the scriptures in the Chinese translation...But speaks in one place in his writing, in light terms of the good results of xty and bewails the bad religious condition of the Japanese. He once told in plain

terms in a letter to a friend that xty will come and win the hearts of the best young men in a few years. Yet to the end of his life never became a xtian.（グリフィス・コレクション、GroupI Correspondence Japan Letters）

B Of Yokoi, lecturer on the ethics and philosophy of Confucianism, spiritual teacher of Echizen, it is enough to say that he was, in influence over his chief, what Alexander Hamilton was to George Washington. Before sinking under the assassin's sword, in Kyoto, in 1869, Yokoi had, through the medium of a Chinese version of the Gospels, discovered the Samurai of the Ages. He saw Jesus in history, and, happily, apart from ecclesiastical dogma and tradition. With quick decision, he became at once His secret and unquailing follower. He predicted that the bright intellects of Japan would, when they knew him aright, accept the Christ. He sent his two nephews to America to study and be the pathfinders for a great host. These lads in 1866, I had the honor of teaching, at New Brunswick, New Jersey.

In the Council of the new government at Kyoto, in1869, Yokoi pleaded for and secured not only freedom of conscience, but also the uplift of the Eta, or social outcasts to citizenship, as great a work, morally, as Lincoln's ; and, like the American, he was assassinated for his pains. A noble record!

（*THE MIKADO: INSTITUTION AND PERSON,* Princeton, 1915, 77･78）

（10） 横井時雄（一八五七～一九二七）の略歴を記すと次のようになる。
熊本洋学校から東京開成学校を経て一八七七年同志社入学。新島襄の娘むつことなる。同志社教授や本郷教会の牧師などを歴任したあと、イエール大学に留学。その後第三代同志社社長をへて政界入りし、一九〇二年衆議院議員となる。そのかたわら東京日日新聞主幹も勤めた。

（11） フレッド・G・ノートヘルファー著、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』（法政大学出版局、一九九二）

（12） *The Golden Rule*（1893）

なお原田助（一八六三～一九四〇）の略歴は以下の通りである。熊本洋学校・同志社に学んだのちイェール大学に留学。帰国後、番町・神戸教会の牧師を歴任し、一九〇七年同志社社長となる。一九二〇年ハワイ大学に招かれ、東洋学部長に就任。晩年までグリフィスと親交があった。

(13) 原田健『原田助遺集』（一九七一）、八〇頁。

(14) 原田健『原田助遺集』（一九七一）、九八頁。

(15) グリフィス著・山下英一訳『明治日本体験記』（平凡社、一九八四）、四五頁。

(16) グリフィス・コレクション（GroupI Box12.5）

(17) 『ミカド　日本の内なる力』、二〇七頁。

(18) 同右、二〇八頁。

(19) 山崎正董『横井小楠　伝記篇』（一九三八、明治書院）、九八八頁。

(20) 同『横井小楠　遺稿篇』、七二六頁。

(21) 小崎弘道 "The Kumamoto Band in Retrospect", The Missionary Review of the World (1913), p. 663.

(22) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』（平凡社、一九八二）四七頁。

(23) 『ミカド　日本の内なる力』、八三頁。

(24) グリフィス・コレクション（GroupI Box13.3）
なおこの論文要旨に関しては、もし採用なき場合は返送して欲しい旨の追伸が付せられて編集者に送られたが、編集者側がグリフィスの依頼を断ったため、返送されてきたことがわかる。

(25) "Japan's Absorption of Korea" (1910)

(26) The Story of Literary Japan 草稿 (1926?)

(27) 江戸期の儒学者の言行や逸話を集めたもの。文化～天保年間の刊行。

(28) 杉井六郎『明治期キリスト教の研究』一二一・一二二頁。

(29) 陽明学とキリスト教の類似性の指摘は、すでに一八七八年の蒲生重章『近世偉人伝』の高杉晋作伝にみられるといい（鈴木範久訳『代表的日本人』、岩波文庫一九九五）、海外においては新渡戸稲造が『武士道』のなかで同様の指摘をしている（岩波文庫、一九三八、三六頁）。

ちなみに、『武士道』英語版の初版はアメリカのフィラデルフィアにおいて一八九九年に出版され、その後好評を得てさらに一九〇五年には増訂され、ニューヨークとロンドンにおいて発行されている。この一九〇五年増訂のときにグリフィスは『武士道』の緒言の執筆を依頼され、それに応えている。そのなかでは特に陽明学や小楠にふれることはしていないが、おそくともこの時点で、グリフィスが『武士道』によって陽明学の存在をキリスト教との関係において知るにいたっていたことは確実と考えられる。

(30) 今日の横井小楠研究の到達点を示すものとして、松浦玲『横井小楠　増補版』（朝日新聞、二〇〇〇年）を挙げておく。

(31) 高木不二『横井小楠と松平春嶽』（吉川弘文館、二〇〇五）。

〔追記〕本稿は二〇〇二年四月から二〇〇三年三月まで客員研究員として在籍したラトガース大学における調査・研究の成果の一部である。

また本稿作成については、桐村彰郎氏の助言を得た。記して感謝に代えたい。